

子どもをとりまく音 ～こちよい音を届ける～

都道府県・指定都市：沖縄県

所属施設名・職名：グッピー保育園 保育士

氏名：木下秀美

I はじめに

「保育所保育指針」の第 5 章 2 の (1) には、「施設の温度、湿度、換気、採光、音などの環境を常に快適な状態に保持するとともに、施設内外の設備、用具等の衛生管理に努めること。」とある。しかし、自分自身の保育を振り返ってみた時、暑さや寒さに対して温度調節を行うことや、換気に気を配ることと同じように、音のついての配慮もしてきただろうか、という反省が生じる。

また、昨今は待機児童問題の解消のために、保育園の建設が増えているが、それと同時に保育園の騒音問題が取り上げられることも多くなってきた。2016 年現在、日本一待機児童が多い東京都世田谷区では、開園予定の認可型保育園の半数近くが、近隣住民による建設反対運動の対象となっており建設が進まない状況である。既存の保育園が、近隣トラブルを防ぐために防音壁を設置することや、窓を二重ガラスにするなどの防音対策をとることも一般的となりつつある。しかしながら、このように近隣住民が騒音と捉えるような環境の中で、心身ともに発達段階にある子どもたちが、日々過ごしているということも大きな問題ではないだろうか。

保育者の体調面から見ても、幼児クラスの担任になると、聴覚の不調や声がれを自覚することがある。子どもたちと同じく、保育者たちも「朝から夕方までの活動時間帯の平均値は 70～90 dB (騒々しい街頭～地下鉄の車内)」⁽¹⁾と、報告されている保育室で過ごしているのだ。しかし、このような環境にあっても、慣れから騒音の中で保育をしているという気づきは薄いのではないかと思われる。

一方、家庭の中でも、子どもたちをとりまく音には大きな変化がある。かつて、テレビに子守りをさせないで、といわれた時代があったが、今では決まった時間に放送されるテレビだけではない。DVD もあり、近年では手軽に持ち運べるスマートフォンやタブレットの普及で、いつでもどこでも繰り返し、好きな動画が見られるようになり、同時にその音を聞いている。

また、子どもが遊ぶ玩具も、言語発達に良いという宣伝で電子音の出るものが多く出回っている。絵本でも指先でボタンを押すと、動物の鳴き声や車のサイレンが鳴るものもあり、子どもは繰り返しその電子音を聞いているのだ。名作と言われる絵本が、次々と DVD 化されてもいる。本来、信頼関係のある人の声で読み聞かせてもらうはずの絵本を、知らない誰かの声でスピーカーを通して聞くのである。子どもの情緒の面から考えても危惧を感じざるを得ない。

このような問題意識から、保育者として子どもにとっての「音環境」について着目し、

家庭や園での現状を調査し検証することとした。また本研究を、園での保育の質の向上につなげるために、保育者の「声」について検討し、こちよい音を届けるための改善の工夫を探ることとした。

II 研究の目的

1. 保育者が自身の声の大きさやトーンについて考え、気をつけることを明確にする。
2. 園児の家庭や保育園における音環境について職員間で共通理解し、保育園での音環境の改善を図ることで、園児にとってのより良い環境を検証する。

III 研究の方法

1. 保育における音環境に関する文献や先行研究を収集し考察を深める。
2. 園児の家庭における音環境について現状を把握する。
3. 保育園の音環境について職員の意識調査を実施し分析を行う。
4. 意識調査から改善策を試みて、その効果を検証する。

IV 研究の内容

1. 保育における音環境について先行研究や文献から学ぶ。

(1) 保育現場の音

「はじめに」でも述べたように、子どもたちや我々保育者が過ごしている保育現場は、地域住民にとっては騒音問題にもなる場所である。吾田氏の調査研究（2011）によると、札幌市内で無作為に抽出された 6 園の保育室の、等価騒音レベルの変動値は 60～90 dB であった。等価騒音レベルとは、不規則かつ大幅に騒音レベルが変動している場合に測定時間内の騒音レベルのエネルギーを時間平均したものである。これを表 1 に示す騒音の目安でみると、保育現場は、博物館の館内のように楽に会話ができる時もあれば、地下鉄の車内や騒々しい工場の中のように、会話に支障を来す時もあるということだ。また、保育中のホールでの活発なあそびや、子どもたちの一斉の歌や掛け声・挨拶、子ども一人の泣き声・叫び声、そして食事の準備・片付けの場面では、音圧の最大値が 90～120 dB と観測されている。120 dB とは騒音の目安で、耳に異常が起きる飛行機のエンジンの近くである。どれほどの騒音になっているかわかるだろう。なお、楽に会話が出来るとされている 60 dB 以下が測定されたのは、午睡時と乳児の授乳中、低年齢児の食事中のみであり、非常に限られた時間帯であることが伺える。

保育現場の音源となっているのは、子どもや保育者の声、生活音、遊びに関わるピアノ・縄跳びなどの音であり、音量に影響を与える要因としては、建物の構造上の問題や、一部屋における子どもの人数、保育内容や保育方法があげられる。

表 1 騒音の目安

50 dB	静かな事務所	
60 dB	博物館の館内	楽に会話ができる
70 dB	騒々しい街頭	大きな声で会話可能
80 dB	地下鉄の車内	会話が困難
90 dB	騒々しい工場の中	通常の会話は不可能
100 dB	電車が通るガード下	とてもうるさい
120 dB	飛行機のエンジン近く	耳に異常が起きる

第 29 主任保育士特別講座修了論文 ＜平成 29 年 2 月末日しめきり＞

(2) 施設・設備の基準に関する外国との違い

児童福祉施設最低基準には、保育所の施設・設備に関する基準は示されているが、「音」に関する基準はない。幼稚園においても音に関する法的規制はなく、学校環境に関する基準はない。衛生基準に、望ましい音の目安として、中央値 50～55 dB が示されているだけである。一方、藤井氏によると、イギリスやオーストラリアなどでは、「部屋の用途に応じた残響時間の目安が基準値として定めら、建物の設計段階から考慮されている」⁽²⁾とある。

保育所における子ども一人あたりの面積でも、日本は、アメリカ、イングランド、フランスなどと比較して、極めて小さいことが、全国社会福祉協議会（2009）によって指摘されている。しかも日本は、子どもの使用・活動スペースとして、諸室に加え廊下までも面積に含むことが可能だが、子ども一人あたりの面積は下位ないし最下位に位置している。

職員の配置基準をみると、ニューヨーク州では、18 か月未満児は職員一名につき 4 名、18 か月～3 歳未満児 5 名、3 歳児 7 名、4 歳児 8 名、5 歳児 9 名とされている。イングランドでは、2 歳未満児は最大 3 名、2 歳児 4 名、3 歳児以上 13 名である。日本は、0 歳児 3 名、1・2 歳児 6 名、3 歳児 20 名、4・5 歳児 30 名であり、職員一人あたりの子どもの人数が格段に多いことがわかる。

園児のグループ規模でも、違いは大きい。ワシントン州のグループ規模は、18 か月未満 8 名、18 か月～3 歳未満 12 名、3 歳 18 名、4 歳 21 名、5 歳 25 名である。ストックホルム市の場合、1～3 歳児クラスは最適目標 12 名・上限 14 名、4～5 歳児クラスは最適目標 16 名・上限 18 名である。日本にはグループ規模についての規定はなく、ひとクラスが大規模になることに制限がない。また、特に身体的にも活動的にも大きくなる、3 歳児以上のグループ規模が大きいと、それだけ生じる「音」も大きくなっていると考えられる。

このように、諸外国と比較して、日本の保育園は、施設や設備の基準が良いと言えない。日本では、音環境の影響を考慮されていない狭い保育室で、ひとりの保育者が大勢の子どもを保育している、という現状がある。

(3) 保育者の「音」への意識

前述したように、日本の保育現場は騒音問題が起こる環境にあり、保育者は狭い空間の中で、大勢の子どもを保育しているという現状である。それによって、大きな声を出す必要に迫られることも多くなると考えられる。その結果、保育士の 8 割は、勤務開始後 3 年以内に音声障害を経験しているという。それに対して、保育室の等価騒音レベルの変動値平均が 63～68 dB であるスウェーデンでは、保育者が大きな声を出す必要はなく、音声障害を経験することも少ない。

音環境から保育を考えるという意識は、まだそれほど広まっているとは言えない。音環境に配慮した保育を行っている園もあれば、騒音といえる環境の中で子どもや保育者が過ごしている園もある。そして、それぞれの園の環境はあまり変化することがないため、たとえ騒音の中で保育をしても、その環境に慣れてしまい、気づかなくなっている。また、「日本独特の文化背景でもある子どもが活動する際の賑やかさを容認する意識」⁽³⁾があることも否めない。吾田氏によると、「静かな園の保育士は音に対する気づきが的確であり、音の大きい園の保育士の方が音源としての自覚があり、騒々しい環境にあると保育士の声も大きくなることを意識している」⁽⁴⁾ことが明らかにされている。どのような園で保育するかによって、保育者の音への意識は大きく左右されるといえる。

2. 家庭における音環境についてのアンケート調査結果と分析

(1) アンケートの概要

- ・調査の目的：家庭で子どもたちが耳にしている音について探る
- ・調査の対象：グッピー保育園在園児 52 名（44 世帯）の保護者 44 名
- ・調査期間：平成 28 年 12 月 12 日配布 12 月 16 日回収
- ・回収数・回収率：36 件 回収率 81.8%
- ・アンケート内容
 - ①電子音の出る玩具や絵本について
 - ②テレビ・ビデオを見る時間について
 - ③パソコンやスマートフォンについて
 - ④寝かしつけについて
 - ⑤車での送迎時について

表 2 園児の年齢と人数（平成 28 年度）

	すずめ組	めじろ組	くいな組	つばめ組
	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3・4 歳児合同
人数 (合計 52 人)	6 人	12 人	12 人	22 人 (3 歳児 12 人 4 歳児 10 人)

(2) アンケート集計

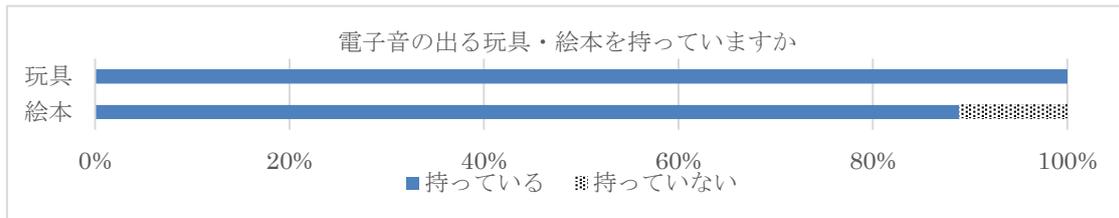


図 1 電子音の出る玩具・絵本について

<電子音の出る玩具や絵本についての保護者の意見> () は人数

楽しんでる (13) いいと思う (11) いっしょに歌う (6) 楽しく学習 (5)
 反応がいい (4) 鳴き声や音がリアルで良い (3) 踊っている (3) 毎日あそぶ
 (2) 音が興味をひく (2) 長く遊ばない (2) 絵本、今は見ない (2) 真似する
 一人で遊ぶ 手先指先を使うから良い すぐ聞ける 絵と音で感じられる
 休日の朝に遊ばせている いろんな音がある 大きい音に驚くことがある
 すぐあきる あまり遊ばない 電池の消費が大変 小さい時に怖かった
 コミュニケーション不足が心配なので時間を決めて遊ばせる

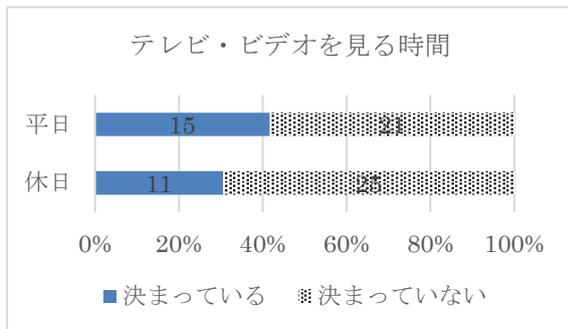


図 2 視聴時間の制限

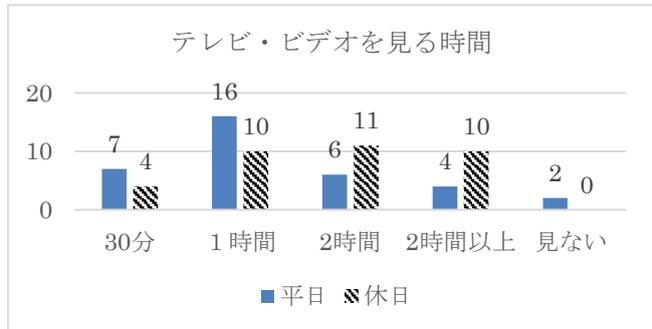


図 3 視聴時間の長さ

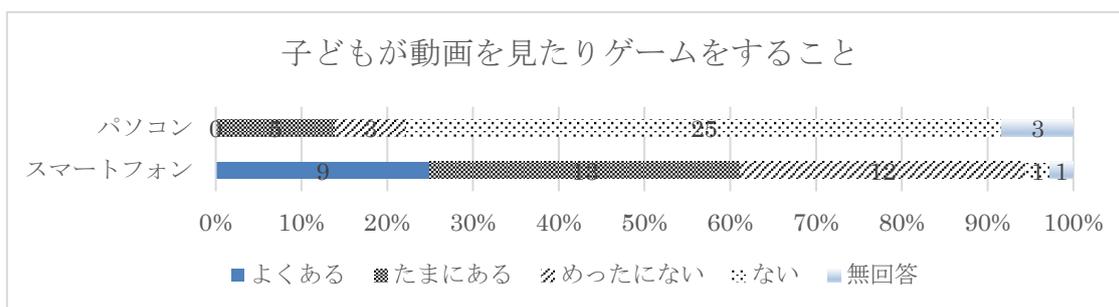


図 4 パソコンやスマートフォンの利用

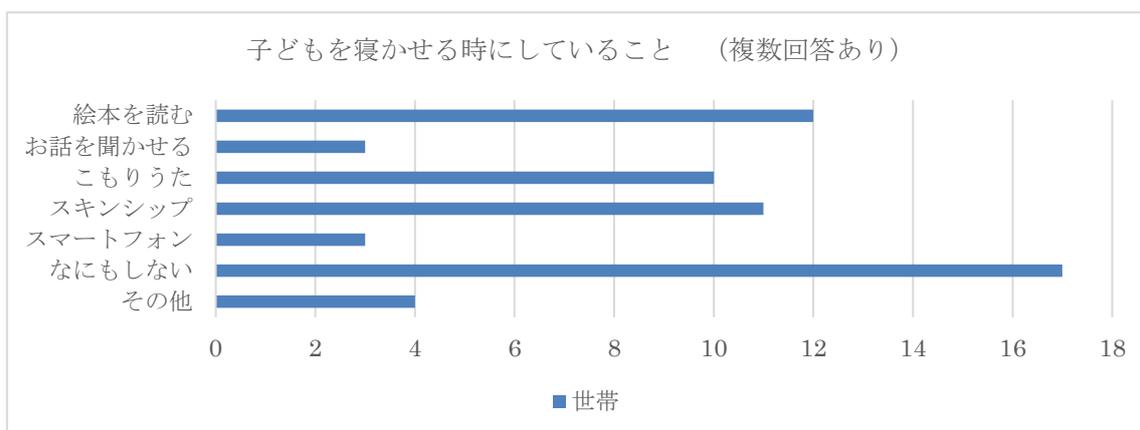


図 5 寝かしつけについて

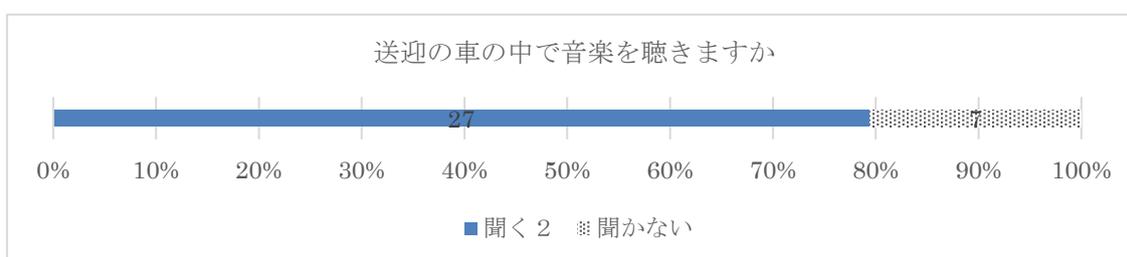


図 6 保育園の送迎時について

(3) アンケート結果の考察

図 1 に示すように、電子音の出る玩具や絵本はほとんどの家庭が所有しており、家庭では、子どもが電子音を耳にすることが多いと言える。

保護者の意見としては、「いい」と思うや「楽しんでいる」が多くあった。子どもが喜んでいたり、玩具を使って歌ったり踊ったりして楽しんでいる様子や、手・指を使うことや学びがあるなど、肯定的にみている保護者がほとんどである。「すぐ飽きる」「長く遊ばない」という意見は少数だった。電子音の出る絵本を、「今は見ない」と書いた 2 名の保護者の、子どもの年齢は共に 3 歳であった。このことから、乳児期の方が音の出る絵本を好むことが考えられる。

テレビ・DVD に関しては、図 2 に示すように、子どもの視聴時間を「決めていない」という意見が、平日では若干多く、休日になるとその割合は増えている。子どもは制限さ

第 29 主任保育士特別講座修了論文 ＜平成 29 年 2 月末日しめきり＞

れることなく、テレビ・DVD を見ている傾向にあると言える。また、視聴時間を見ると（図 3）、平日では 1 時間が多いが、休日になると 2 時間および 2 時間以上と答えた家庭が平日の約 2 倍になる。休日には視聴時間が増えることが伺える。

次に、子どもがパソコンやスマートフォンを使って、動画を見ることやゲームをすることがあるかを調べた結果が図 4 である。スマートフォンの利用は 6 割を超えていた。パソコンに比べて、スマートフォンの利用が多いのは、手軽に持ち運び出来る便利さがあるからと思われる。スマートフォンの普及は、子どもたちの、家庭での音環境に影響を及ぼしていると言えるだろう。

また、スマートフォンで「寝かしつけ」と検索すると、アプリや動画が様々出てくる。しかし、図 5 を見てわかるように、寝かしつけにスマートフォンを利用しているのは、3 世帯のみであり全体の 1 割にも満たず少なかった。6 割以上の家庭で、子どもにスマートフォンなどを使わせているものの、夜眠る時には、親が絵本を読んだり、子守り歌を歌ったりスキンシップをとるなどが多いことは、親子の関わりにおいて重要な観点であると思われる。

保育園の送迎時（図 6）はアンケートに回答した 36 世帯中 35 世帯が車を利用しており、その約 8 割が送迎の車内で音楽を聴いていることがわかる。静かな車内で会話をしながら送迎がされているとは言い難い。子どもが喜ぶ童謡や、その時々で子どもが好む歌や曲であっても、車内で絶えず音楽を聞いている状況が推察される。

3. 保育における音環境についての職員の意識調査

(1) 意識調査の概要

- ・調査の目的：保育者が環境としての「音」に注目し、日ごろ意識していることや現状を考えるきっかけにする
- ・調査の対象：グッピー保育園全職員 17 名
園長、副園長、主任保育士、子育て支援員それぞれ 1 名
調理師 2 名 保育士 11 名
グッピー保育園全園児 52 名 詳細は表 2 参照
- ・調査期間：平成 28 年 12 月 14 日～19 日
- ・回収数・回収率：17 名 回収率 100%
- ・調査内容：「保育における音環境チェックリスト」⁽⁵⁾を参考にして作成

＜項目＞

- ①園の中にある様々な生活音に気づいている
 - ②園にあるモノ（机や椅子など）が発する音の大きさや質について気づいている
 - ③園にある遊具・玩具が発する音の大きさや質について気づいている
 - ④子どもに話しかける時の声の大きさや調子を気にかけている
 - ⑤環境として「音」のことを意識している
 - ⑥保育をしていて騒がしいと感じる時がある
- *④にあてはまる・・・それはいつか？具体的に記入
*⑥にあてはまる・・・どのような事か？具体的に記入
*保育をする中で気にかかる「音」についてあれば自由に記入

(2) 意識調査の結果

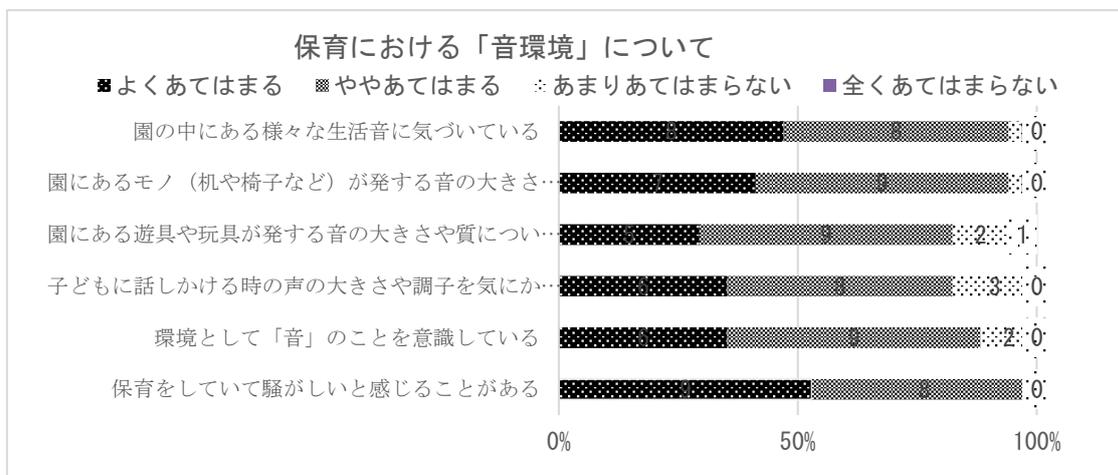


図7 保育における「音環境」について

表3 保育をしていて騒がしいと感じるとき ()は人数

時間帯	食後 (4) おやつ前後 (4) 着替え (4) 食事中 (2) 3・4歳児の午睡前=他クラスが先に寝静まっている (2) 帰り支度 活動の合間
状況	3・4歳児が園庭へ出たとき (3) 走り回っている (2) 泣いている 他クラスと合同である 全体で集まるとき 椅子をひきずる
子どもの声	興奮している (3) 3・4歳児の声 キヤーと高い声を出す=頭を刺すような痛みを感じることもある
保育者の声	子どもへの声かけ (2) 叱るとき 子どもの声が大きいと保育者の声も大きくなる

表4 子どもに話しかける時、気にかけていること ()は人数

距離	そばに行って話す (3) 遠くの人を呼ばない (2)
声の大きさ	静かに話す (5) 大勢の集まりの時に小さな声にする (5) みんなに聞こえるような話し方 (4) 声のトーンを変える (2) 一人に話すときと全体に話すときで声の大きさを変える (2) 大声にならない

第29 主任保育士特別講座修了論文
 <平成29年2月末日しめきり>

注目させ方	手遊びやきれいな音色の鈴を使う 騒がしい時には、あえて小さな声で話す 名前を読んでから話しかける
言葉	子どもが理解できる言葉を使う（2） ゆっくり丁寧な言葉を使う 早口にならない
その他	目を見て話す 注意する時に感情的にならないようにする よく聞く耳を育てたい 子ども自身も静かに話すよう伝えている

表5 保育をする中で気にかかる「音」について （ ）は人数

子どもの声	急に発する「キヤーキヤー」という甲高い声（2） 泣き声（2） 保育者が側にいても大きな声で呼ぶ（2） 常に大きい声で話している（2） 全体で集まり保育者が話す時の子どもの話し声
保育者の声	紙芝居や絵本を読んでいる時にその側にいる保育者の声（2） 声の大きさ 大きな声で全体に話すことが多い 声かけの量が多すぎないか？ 会話というより指示が多くないか？ 子どもが騒がしい時さらに大きな声を出す
室内	子どもが椅子を引きずる音（2） テーブルの脚を立てる音 テーブルや椅子の出し入れ 電話の音 午睡時の電話の音 扇風機のカラカラ鳴る音 保育者のドアの開け閉め CD曲の音（自由に遊んでいるときに流す）の大きさ 遊んでいる時にBGMの曲は必要あるのか？ トイレの中の声が響く
屋外	車の音 午睡時のゴミ収集車の音 オスプレイや戦闘機の音 自然を感じる音が少ない（虫や鳥）
その他の意見	保育園の騒音は難聴になるレベルであり乳児は中耳炎を起こしやすい お隣のアパートの住民が定着しないのは、当園の騒音が原因ではないか 子どもや保育者の声の大きさだけでなく、楽器や歌なども考えていきたい 子どもの活動量についても考え、あそびや環境の創意工夫をしよう 急いでいると雑になり大きな音を出しやすいため、気をつけている 不思議と子ども同士の会話は大声でも耳障りではない 子どもの話し声は聞いていて優しい気持ち・幸福な気分になり和む 子どもの元気な声は大人に活力を与え、心を優しくする力があると思う 子どもとの関りでもゆっくりていねいな保育を心がけたい 音について考えると、普段気をつけられていないことにととても反省する

(3) 意識調査の結果の考察

我が園の保育者の多くは、園内の生活音や自身の声の大きさについて、なんらかの気づ

第29 主任保育士特別講座修了論文 ＜平成29年2月末日しめきり＞

きがあることが、図7からわかる。しかし、「よくあてはまる」が、どの項目においても半数に満たないということは、強く意識している保育者が少ないということであり、快適な音環境の中で保育を行っているとは言い難い。また、気づきはあるが、実際の改善策をとっていない現状から、職員全員が、保育をしていて騒がしいと感じることがあると答えているのだろう。

表3を見ると、騒がしいと感じる時間帯としては、食事やおやつや着替えといった生活の時間が多く挙げられている。着替えは食後にしているので、食後から午睡前まで騒がしい時間が続いていると言える。食事中と記入されたのは3・4歳児クラスに限られていて、未満児クラスに比べて、食事をしながら会話することも多くなるからだろう。実際、未満児クラスの食事中は、おおよそ静かである。それは、会話よりも食べるということに集中していることと、クラスの子どもの人数も少ないからだと考えられる。しかし、表2に示すように我が園は小規模園であり、3・4歳児クラスは22名でそれほど大人数ではない。楽しいはずの食事中の会話が、エスカレートして騒がしさになっていることは、保育の見直しと工夫の必要が求められる。

もう一点、保育の見直しとして、保育者自身の声を上げる必要がある。子どもの声だけでなく、「保育者の声大きい」という意見も出ている。「大声にならないよう気をつけている」人もいれば、「急いでいると大きな声になってしまう」自覚がある人もいる。また、「子どもの声大きいと保育者の声も大きくなる」という意見から考えると、みんなに聞こえるように話そうとして、保育者の声が大きくなっていると推測される。

一方で、表4を見ると「大勢の集まりの時に小さな声にする」と意識している保育者が5名いた。大勢で集まると騒がしくなりがちだが、あえて小さな声で話すことが、子どもを集中させ、騒がしさを静める。この意識を保育者間で共通認識すれば、保育者の声の改善が図れると考えられる。

また、「絵本を読んでいる時、側にいる保育者の声が気にかかる」という指摘（表5）は、読み聞かせをする時の環境として考えても、保育者の配慮の欠如であり、解決すべき課題である。

子どもの声には、大きさだけでなく、甲高い「キャーキャー」と興奮した声が気になる、という意見が多く出ている。「その場にいるより、離れている方が強く感じる」という意見があり、側にいる担任は、子どもの声に慣れてしまうことが危惧される。また、3・4歳児が走り回るときの声の大きさにも意見があった。園庭が広くなく民家のすぐ隣にあるため、配慮が必要である。しかし、子ども同士の話し声が、大人に活力を与えたり、気持ちを和ませたりすることも重要な観点である。

施設や備品に関するものでは、テーブルや椅子の音が気になる音として挙げられている。日常的に使うものなので、これらの音が改善されると、音環境の変化が期待できると考えられる。また、これらは、大規模な改修などの必要もないため、すぐに実行に移すことが可能である。

ゴミ収集車や車の音は、車道の側に建っているという園の立地的な課題であり、改善は容易ではない。そして、沖縄特有の問題としては、朝夕問わずに、まわりの音や声をかき消すほどの爆音、戦闘機やオスプレイの音が挙げられる。恐怖を感じるこれらの音は、早急に解決されるべき問題である。

第29 主任保育士特別講座修了論文 ＜平成29年2月末日しめきり＞

4. 保育における音環境についての改善策の試行

(1) 試行の目的

保育者の音環境についての意識調査をもとに、保育者の声の大きさについての改善策と、子どもの椅子の音の改善策を全職員で試行し、保育者自身の変化や子どもたちの変化を検証する。

(2) 試行期間および検証までの日程

平成29年1月 6日 保育における音環境についての職員の意識調査の結果と分析を、書面および口頭にて職員に報告する。また、全職員に向け、改善策の試行を依頼する。

1月 6日～1月21日 改善策の試行

1月23日 改善策試行後のアンケート配布

1月25日 改善策試行後のアンケート回収

1月27日 職務会にてアンケート結果の集計と分析を報告

(3) 試行する改善策

①いつもより小さな声で話す。

②側に寄って話す。 遠くの人を呼ばない。

③子ども用の椅子の脚に吸音効果が期待出来るフェルトを貼る。

＜吸音対策のフェルトの試行に至るまでの経緯＞

0歳児クラスの沐浴・トイレコーナーには引き戸タイプの低い柵があり、開閉のたびに大きく響くレールの音が気掛かりであった。先行研究の中に、吸音シートを張ることにより「不快に感じる音を軽くさせる工夫」のアイデアがあり、試してみたところ、とても効果がありそれまで気になっていたレールの音が殆ど気にならなくなった。これをきっかけに、0歳児クラスの子どもの椅子の脚にも吸音シートを貼ってみると、椅子を床に置いた時に出る音が驚くほど小さくなった。この経験から、全クラスの椅子にも吸音シート貼ることにした。

(4) 試行後のアンケート結果

①「いつもより小さな声で話す」ことでの変化や気づき（要約）

- ・子どもが話しを聞こうとする
- ・穏やかに話すと子どもも穏やかに返してくれる
- ・心が穏やかになる 保育も穏やか、丁寧になる
- ・慌ただしい時も小さな声を意識すると気持ちが落ち着く
- ・保育者は意識したので話し声が小さくなった
- ・声の大きな保育者が目立つ
- ・子どもたちの変化はあまりない
- ・子どもも真似をして小さな声で話す姿がある
- ・小さな声では話せない状況があり話術などの必要を感じる
- ・大きな声で話すことに慣れていて小さな声を意識するのが意外と難しい
- ・意識することでまわりの音が大きく聞こえて気になった

②「側に寄って話す・遠くの人を呼ばない」ことでの変化や気づき（要約）

- ・子どもに伝えたいことをしっかり目を見て話せる

第29 主任保育士特別講座修了論文 ＜平成29年2月末日しめきり＞

- ・しっかり相手と向き合いゆっくり話することができる
- ・子どもたちも話しを聞きやすい
- ・保育者を呼びたい時にその場から離れられず困った
- ・大きな声で呼ぶ保育者がいると気になった
- ・保育者は意識していた 子どもたちにも声かけすれば意識していた
- ・つい遠くの人を呼ぶことがあり反省
- ・保育者の声が飛びかかっていない状況はとても良い
- ・危険な時、咄嗟の時には大きな声を出してしまう
- ・子どもたちの変化は感じられない
- ・側に寄るといふ一つの行動が保育の丁寧さにつながる

③「椅子の脚にフェルトを貼る」ことでの変化や気づき（要約）

- ・音が響かなくなりとても良い
- ・今まで音がいっぱいありそれに耳が慣れていて感じた
- ・テーブルを用意する時の音にも気をつけるようになった
- ・椅子のすべりが良くなり押すことが楽しくなった子がいる
- ・保育者が椅子に乗って高いところに手を伸ばした時すべってしまった
- ・机やドアにもフェルトを貼って収音したい

(5) 改善策を試行した後のアンケートからの考察

保育者が意識して、小さな声で話すことや、側に寄って話すことは、子どもが話しを聞くようになる態度につながった。また、声の意識は、「穏やかになる」「落ち着いて話せる」「イライラしない」など保育者自身の気持ちの変化にもなった。声は気持ちの表れであり、声をコントロールすることは気持ちをコントロールすることと言える。そして、保育者が気持ちをコントロールして、子どもに関わることで、穏やかな保育、丁寧な保育ができることが推測される。

一方で、大きな声で話すことや、離れた場所にいる人を大きな声で呼ぶことが、習慣となっていると、「思ってもできない」「つい遠くの人を呼んでしまう」などそれを「変えていくのは難しい」という率直な意見もあった。なぜ、大きな声で話すことが習慣となっているのか、保育者自身が、自分の発する声が、子どもの音環境のひとつであると自覚することが求められる。

保育者が声の大きさに気をつけても、子どもの声の大きさの変化については、あまり見られなかったという意見が多かった。2週間という期間の短さが、その要因のひとつだろう。しかし、「保育者が小さな声で話すと子どもも小さな声で話した」という報告もある。子ども全体の変化としてはなくても、保育者との関りの一場面で変化があれば、今後の変化について期待できると考えられる。引き続き、保育者は自身の声の大きさに気をつけることが重要である。

椅子の脚に吸音対策のフェルトを貼ったことは、大変効果があり、騒音の減少に役立った。また、それまで、椅子の音を騒音として気にしていなかったことや、騒音があっても慣れてしまっていた、という気づきになった。相乗効果として、椅子だけでなく、テーブルの脚を開く時に出る音にも配慮する保育者が増えた。意識することで防げる音があることに気づいたことも、重要な観点である。椅子の音が、ガタガタと響かなくなり、食事準

第29 主任保育士特別講座修了論文 ＜平成29年2月末日しめきり＞

備や片付けの時に感じられた騒がしさも改善された。このことは、保育者から気になると指摘のあった、食事前後の慌ただしさの軽減にもなり、子どもにとってのよりよい環境になったと言える。

また、椅子の音の改善からも、「心が落ち着く」という気持ちの変化が挙げられ、声と同様に「音」と「気持ち」とは密接に関係していると推測される。

フェルトの吸音効果が実証されたので、ほかにもテーブルの脚やドア、ままごとに使う木製の流し台など、音が気になっていたものにも、フェルトを貼り効果を得ている。

V まとめと今後の課題

子どもにとっての音環境について調査・分析した結果、子どもたちは家庭や保育園において、静かな環境で過ごしているとは言い難い状況であった。特に日本の保育園は諸外国と比較して施設・設備の条件が悪く、騒音レベルは70～90 dB₍₁₎であり聴覚の異常も危惧される。我が園も同様に、全保育者が、騒がしいと感じる時があると認識していたことも明らかになった。

保育者も子どもにとっての音環境であるという視点から、「保育者の声」に着目し、具体的に①小さな声で話す②側に寄って話す・遠くの人を呼ばない、ということ意識して保育を進めてみた。その結果として、騒音の変化より、保育者自身の気持ちの変化として「穏やかになった」という意見が多く挙げられた。そして、声のコントロールは気持ちのコントロールである、という気づきがあったことは重要な観点である。慌ただしい場面でも小さな声を意識すれば気持ちが落ち着くことで、子どもへの対応も落ち着いたものになり、その積み重ねが、声の騒音の減少につながると考えられる。

保育者が声の大きさを意識することは、子どもにとってより良い循環を生み出し、園の保育の質の向上にもなると言えるであろう。現時点では、まだ個々の保育者によって、意識の度合いに差があることは否めないが、本研究の成果を共通理解し、一人一人の保育者が、自身の声の大きさを意識する習慣を身に着けることが望まれる。保育者の声の変化は、いずれ子どもの声の大きさにも良い影響を及ぼすと期待できる。

また、今後の課題としては、保育者の声の大きさだけでなく、言葉かけについての検討も必要であると考えられる。保育者が子どもに向けて、指示の言葉や行動を急かすような言葉が多いのではないかと推測されるからである。

今回の研究で、騒音の改善の効果があつた椅子の吸音対策以外にも、園内で生じる様々な生活音や、CDの利用、楽器を使う取り組みなどにも、「騒音を騒音として捉える」敏感さを持ち、対処や工夫をしていくことが重要である。

VI おわりに

「音」は、目には見えないが、子どもや我々保育者にとって、重要な環境である。本研究から、音が気持ちに及ぼす影響が大きいことにも気づいた。だからこそ、保育者が声の大きさやトーンに気をつけることで、子どもにとって、こちよき音を届けることも出来るのである。保育者として、「音のあるこちよきと音のないこちよき」を知る感性を持ちながら、音に対して敏感でありたいと思う。

第 29 主任保育士特別講座修了論文
＜平成 29 年 2 月末日しめきり＞

本研究は、園の職員や保護者の協力のもと進められ、実際に全職員で試行することで、保育者の声の大きさや椅子の音に変化があり、少なからず音環境の改善が図られた。今後、園の職員と協力し、子どもにとってより良い環境を作っていく所存である。

(15830文字)

＜引用文献・参考文献＞

- (1) 志村洋子・藤井弘義・奥泉敦司・甲斐正夫・汐見稔幸
「保育室内の音環境を考える（2）」－音環境が聴力に及ぼす影響－
埼玉大学紀要（2014） P 60
- (2) 藤井弘義 「“音環境”の整備で保育が変わる，子どもが変わる」
『エデュカーレ』第19号（2007） P 45－49
- (3) 志村洋子・藤井弘義・奥泉敦司・甲斐正夫・汐見稔幸
「保育室内の音環境を考える（2）」－音環境が聴力に及ぼす影響－
埼玉大学紀要（2014） P 60
- (4) 吾田富士子 「保育の音環境と保育の質」－保育者の気づきから吸音材使用に取り組んだ園の音調査から－ 藤女子大学紀要第49号（2012） P 78
- (5) 平成21年度文部科学省科学研究費補助金研究
「音環境をいかした保育のカリキュラム開発」の一環として岡本拓子らによって作成されたもの okamoto-horoko.sakura.ne.jp
松寄洋子・吉永早苗・岡本拓子・武藤隆・新開よしみ
「保育現場の音環境に関する意識の構成要素と関連要因」
埼玉学園大学紀要（人間学部篇）
岡本拓子 「音環境からみる保育」『THE 保育 101の提言 vol,3』 無藤隆編集
フレーベル館（2010） P 166－171